

「保護抜け働きたい」

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第2部 親は… <6>

◎

リカ(下)

昨年11月、販売員をしていた元(3)が体調不良で入院した。検査の結果、血液のがみである悪性リンパ腫であることが分かった。放射線治療を行い、がんはいったん治療できたが、現在は寝たきりの状態。再発の可能性が高いが、これ以上の放射線治療は体への負担が大きい。次女(1)には通院して、介護施設に入ることを決ましている。

元(3)は独身で、リカ(2)は、白閉症の義理と年長性心臓病のある次男を含む4人の子育てをしながら、病室通いや介護施設探し、生活保護などの手続きに走り回っている。

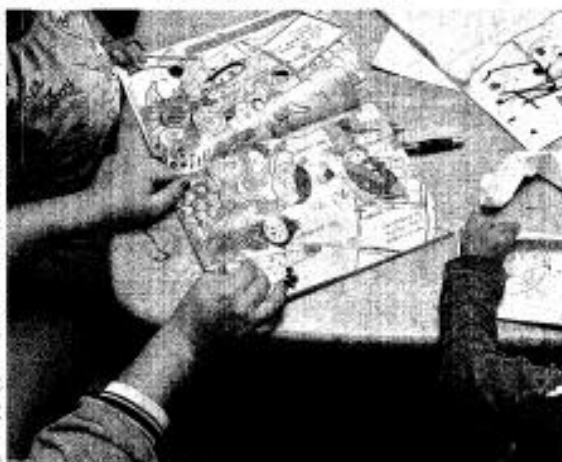
金銭的な負担も大きい。検査費や入院費、日々のおむつ代などばかり、元が住んでいたアパートの家賃や光熱費の支払いもあった。親族で工面もあったが、お金のことで口論が増えた。リカは3人きょうだいの末っ子。母子家庭で育ち、72歳の母は年金生活。四つ上の姉も母子家庭で、調理の仕事しながら小生一年と5歳の子を育てているが、手取り月収は10万円以下だ。

親族の誰にも経済的余裕はない。「悪循環が続いている。自分の家だけでもやっとなのこ」。親族間で水平に、貧困の連鎖が起きています。

リカには「仕事に就いて、早く生活保護を抜ける」という目標がある。

理由の二つが車だ。沖縄では

病児ケア少ない受け皿



子どもたちに絵本を読み聞かせるリカ。障がいのある子どもを含む4人の子育てに、病気の元の世界が知り、さらに忙しくなった

特に子どものいる家庭の生活に車が欠かせないが、生活保護では車の保有は基本的に認められていない。保険料や税金が維持費が高額になり、最低生活費を圧迫する、というのが理由だ。

リカの4人の子どものうち、3人は未就学児で、親族に預け出す。心療科の次男は近所の小児科では対応できず、車でも分かかる専門病院に行かなければならない。ほかの子どもたちを連れ、次男の酸欠療法用のポンプを持つてのバスでの移動は困難。料金の割高なタクシーを利用せざるを得ないことが多

い

■ 次男は現在、障がいのためのデイサービスに通っている。週3日のうち2日は午前10時から午後2時、残りの1日は午後5時半まで。兄の件があつて現在週4日に増やしてもらっているが、それ以外の時間は、リカが自宅で見なければならぬ。

医療ケアが必要で子どもをみるデイサービスは数が少なく、希望者が多いため、利用できる日数は限られるという。

「フルタイムで次男を預けることができれば助ける」と、障がいのある児童を認可保育園で預かる市の発達支援保育所に応募したが、最近「預けられず、集団生活での安全な預かりが困難」という通知が来た。

「(2)としては保護を抜け、一歩前に進めようと思ったのに」と悔しさをにじませるリカ。「生活保護を抜け、自立したい。障がいのある子どもを安心して預けられる場所が増えたら」と願いを口にした。(文中仮名)

■ (2)子どもの貧困「取材班・高橋幸子」■ 火・木曜日掲載